

# 人麻呂石見相聞歌試論

——海と山の風土を視点として——

森

斌

## はじめに

柿本人麻呂の代表作を相聞歌から選ぶとき、石見相聞歌（巻二・一三一―一三九）を採り上げるときは、まず異論がないのであるまいか。勿論代表作というとき、その言葉の示す内容は様々なものが含まれているのであろうが、とにかく伝承と推敲という問題のみならず多面的な問題を内在している作品である。その中から風土という問題を一つとつても議論が種々に展開されているし、その風土を踏まえた優れた論文には高木市之助氏や清水克彦氏のものがある。<sup>(1)</sup>

まずは風土と文学という視点を支えとして石見相聞歌を考察したい。

柿本朝臣人麻呂の石見国より妻に別れて上り来し時の歌二首并せて短歌

I 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 渴  
なしと（一は云はく、磯なしと） 人こそ見らめ よ  
しゑやし 浦は無くとも よしゑやし 渴は（一に  
云はく、磯は）無くとも 鯨魚取り 海辺を指して  
和多津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝は  
ふる 風こそ寄せめ 夕はふる 浪こそ来寄せ 浪の  
共 か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を（一  
に云はく、はしきよし 妹がたもとを） 露霜の 置  
きてし来れば この道の 八十隈毎に 万たび かへ  
りみすれど いや遠に里は放りぬ いや高に 山も越  
え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む

靡けこの山(二・一三二)

反歌二首

石見や高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか  
(一三三)

小竹の葉はみ山もさやに乱げどもわれは妹思ふ別れ来  
ぬれば(一三三)

或る本の反歌に曰はく

石見なる高角山の木の間ゆもわが袖振るを妹見けむか  
も(一三四)

II

つのははふ 石見の海の 言さへく 韓の崎なる 海  
石にそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉藻は生ふる 玉  
藻なす 靡き寝し児を 深海松の 深めて思へど さ  
寝し夜は いくだもあらず 這ふ蔦の 別れし来れば  
肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへりみすれど 大  
船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱ひに 妹が袖 さ  
やにも見えす 孀隠る 屋上の (一は云はく、室上  
山) 山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠  
ろひ来れば 天つたふ 入日さしぬれ 大夫と 思へ  
るわれも 敷栲の 衣の袖は 通りに濡れぬ(一三五)

反歌二首

青駒の足搔を早み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にけ

III

る(一は云はく、あたりは隠り来にける)(一三六)  
秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱ひそ妹があたり  
見む(一は云はく、散りな乱ひそ)(一三七)

或る本の歌一首并せて短歌

石見の海 津の浦を無み 浦無しと 人こそ見らめ  
濁無しと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも  
よしゑやし 濁は無くとも 勇魚取り 海辺を指して  
柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 明け  
来れば 浪こそ来寄せ 夕されば 風こそ来寄せ 浪  
の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 靡きわが宿し 敷  
栲の 妹が手本を 露霜の 置きてし来れば この道  
の 八十隈ごとに 万度 かへり見すれど いや遠に  
里放り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 愛しきやし  
わが孀の児が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の  
里見む 靡けこの山(一三八)

反歌一首

石見の海打歌の山の木の際よりわが振る袖を妹見つら  
むか(一三九)

右は、歌躰同じといへども句々相替れり。因りてこ  
こに重ねて載す。

さて、I II IIIのそれぞれの歌群の特質については、本論

の考察の対象にしていけないが、ⅠとⅡの歌群については、中西進氏のいう第一長歌群が妹に焦点があり、第二長歌群はわれの描写に主眼がある、という理解に賛同している。<sup>(2)</sup>またⅢの歌群についても、ⅢからⅠへという推敲による内容の説明では未だに問題がある。それは、固有名詞の相違ということを推敲に依るものであるという十分な説明のなされるべきであると判断する。この論では推敲とか伝承とかを考察するためではなく、作品が風土に支えられていることを確認する意味で、固有名詞が変わっている問題をまず考察の対象にしたい。

## 一、固有名詞

石見相關歌群をⅠⅡⅢに分けて考へるのは、この論では特別の意味が有るわけではないが、長編であるための便宜的な処置である。そこで、ⅠⅡⅢのそれぞれのグループから固有名詞として登場しているのを採り上げれば次の如くである。

### Ⅰ 一三二～一三四

石見の国 石見の海 角の浦廻 和多津 高角山

### Ⅱ 一三五～一三七

石見の海 韓の崎 渡の山 屋上の山 室上山

### Ⅲ 一三八、一三九

石見の海 津の浦 柔田津 打歌の山

伝承に因るにせよ、推敲によるにせよ、地名等が変わっていることの説明はなされなければならない。とりわけ推敲説は、ある主体をもつ人麻呂という作者が個人的な文学創作意識をもち、その過程で完成度を高めるといのであるから、古代の地名が含みもつ神聖な意識からは、なおのこと地名の変化が忽せにできない問題点になる。推敲説を支持された橋本達雄氏は、「では人麻呂はなぜ同じ地名をさまざまに歌い変えたのかという疑問が残り、多様な理由が考えられ、その一つは多分文芸としての表現効果の上からのものと思われるが」としていても、いまだ統一的には説明できないとして、後日の問題としたい、としている。<sup>(3)</sup>

もし創作主体が風土と関係がないのであれば、歌に登場する地名は風土を担わないのであるからかなり自由に、しかも適当な判断で入れ替わるであろう。もつと別な言い方をすれば、地名などは空白にしておいて後から自由に入れても良いことになる。「石見の海」は、「出雲の海」や「長門の海」に変えられるし、それでも良いことになる。なぜならば浦や潟がないことでは、出雲も長門もそれぞれ石見

と共通するかもしれないのであるから、何時でも何らかの都合で地名に変更が加えられるであろうし、それは風土のないものでは至極可能なことであろう。ところが、風土を担う作品であつても、その地名がその土地に住む人間にとつては大事なものでありながら、土地がよく知らていない鄙びた地名の変更などは、都の人々にいつたい何をもたらずのであろうか。とすれば、橋本氏の言う表現効果も歌枕でもない見知らぬ地名などに関しては配慮して良い。

もちろん地方だからといって有名な地名であれば享受者に直接影響を与える。しかし、それは主に歌枕と述べるべきレベルの事柄の場合であろう。石見相聞歌には、かかる歌枕がない。とすれば推敲に因る地名変更であれば必ず作家による変更するための主体的な理由が無ければならない。例えば固有名詞の「屋上の山」(一三五)と「室上山」(一三五一云)、「高角山」(一三三)と「打歌山」(一三九)は、推敲による変更とすればどう説明するのであろうか。

固有名詞の推敲による変更の説明には、とくに伊藤博士の説が有力なものとして引用されている。<sup>(4)</sup>伊藤氏の考え方は次のごとくである。「打歌の山」から「高角山」に推敲したのは、「打歌の山」が純然たる固有名詞であつて、「高

角山」のような表現性を持たないからとしている。即ち、「高角山」は「高い」「角の山」という意なのであり、その山が妹の里との境にあつて、妹との決定的な別れとなる境の山なのである。従つて、「打歌の山」では第三者に伝わらない意図も「高角山」ということで「角の里」にいる妹との「見納め山」としての意図も伝達されることになる。さらに普通名詞から固有名詞に推敲された例として、「津の浦」(一三八)から「角の浦廻」(一三一)になつた句を採り上げている。論旨は、妹の里が「角」なのであるから、普通名詞の「津」では表現効果が希薄になるとしている。これらは固有名詞から普通名詞に、あるいは普通名詞から固有名詞への変化を推敲で説明できるとしたものであるが、次には固有名詞が異なる場合を紹介したい。

「室上山」と「屋上の山」については、その山に二つの名があることを不自然だとして、「室」は神にかかわるもので人間に本来かかわらないが、しかし「月」を「妹」に見立てるにあつては、共寝の「妻屋」の「屋」を連想させる「屋上の山」の方が効率的である、としている。

ところで山の名前は、固有名詞と普通名詞と言う概念で説明できるのであろうか。確かに高い「津」の山という普通名詞的な解釈も成り立つのであるから、「高津の山」が

普通名詞とも考えられる。しかし、仮に普通名詞としての言い方として、固有名詞「打歌の山」という山と全ての点で重ならないにせよ、普通名詞が用いられているうちに固有名詞として「高津の山」が成立することもありえる。とすれば「高津の山」が固有名詞「打歌の山」という解釈がなりたつことまでも否定できない。そもそも山の名前が一つしかないなどと考えることが近代的である。津から見たら高津の山であり、他の場所から見たら打歌の山ということも十分考えられる。地域地域により同じ山でありながら名称を異にすることが多いと考えるのが、当たり前なのであるまいか。もし高津の山と打歌の山が同じで、さらに現在の呼称が鳥屋山であれば、当然見納め山にも考えられる程その地域で特徴を持っているのであるから、色々な場所からそれぞれ複数の呼び方がされていても不思議ではない。

一方、室上山と屋上山などは、室と屋の違いを文学的な問題とするよりも、伝承過程で生じた違いで十分納得できるのであるまいか。

そもそも万葉の地名については、一般的には伝承による違いに由来する場合が多々あるのである。例えば、次の二首の比較を試みたい。

#### 天皇の御製歌

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は零りける その雪の 時なきが如 その雨の 間なきが如 隅もおちず 思ひつつぞ来し その山道を(一・二五)

み吉野の 御金の岳に 間なくぞ 雨は降るとふ 時じくそ 雪は降るとふ その雨の 間なきが如 その雪の 時じきが如 間もおちず われはそ恋ふる 妹が正香に(十三・三二九三)

この二首の長歌を比較してまったく無関係の歌という人はいないであろう。では関係あると考えたとき、いかなることがいえるのであろうか。まずどちらが原型に近いのか、あるいは、どちらの作に影響されたのであろうかなどが興味ある問題になっているが、この考察では「耳我の嶺」と「御金の岳」という山の名称が変わっていることは、どう考えるべきことなのであろうか、ということに問題を絞ってみたい。

天武の御製歌と卷十三の歌とは山の名前以外にも、若干の違いが見られるが、本質的な相違として卷十三の歌は、ある集団によつてうたわれていたのではあるまいか。そう考えると、卷十三の歌は吉野の時人とでもいふべき集団

によつて伝えられていた可能性がある。とすれば固有名詞などは、都の人よりも吉野の地元の人によつて改編される可能性はある。すなわち、歌を伝え、さらにこの歌をうたう人々により親しまれた山名や、あるいは身近な山名に変えられるということである。その意味では、創作に関わる人も当然であるが、伝承者の地名に与える影響がまず第一義的な場合もある。

さて、歌が口誦されていくとき、人麻呂の騷旅歌などはきわめて地名が不安定になっている。天平八年遣新羅使は、「所に当りて誦詠せる古歌」として人麻呂歌六首を含めて全部で十首口誦さんでいる。

玉藻刈る乎等女を過ぎて夏草の野鳥が崎に廬すわれは  
(三三六〇六)

天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり  
見ゆ (三三六〇八)

武庫の海の底よくあらし漁する海人の釣船波の上ゆ見  
ゆ (三三六〇九)

安胡の浦に船乗りすらむ少女らが赤裳の裾に潮満つら  
むか (三六一一〇)

人麻呂作のうち四首を引用したが、これらには地名の変更と地名の一般化がある。「乎等女」が「敏馬」から、

「家のあたり」が「大和島」から、「武庫の海」が「飼飯の海」から、「安胡の浦」が「網の浦」からそれぞれ伝承過程で変わったと考えられている。それは、原歌とされる巻三・二五〇、二五二、二五五、巻一・四〇番等が既に記録されて伝えられていたか、或いは文献資料として存在していたであろうから、遣新羅使の誦詠歌は伝承として存在していた歌にせよ、同様に天平八年使人に朗詠されたものを遅くともその航海中に記録されたものとせざるをえないことによる。

(伝承(誦)歌<sup>(5)</sup>というものは、遣新羅使の古歌誦詠を参考にしたとき、地名が極めて不安定なものである。しかし、人麻呂の原歌からかけはなれて地名が変わってしまうものでもない。乎等女という地名と敏馬という地名、加えて武庫と飼飯という地名との距離的な近さ、大和と家という言葉が持つ故郷という内容、さらに安胡と網という音の類似と地名としての距離的な近さ等を参考にしたとき、伝承者により恣意に基づく改編ということは、よほどの理由がない限り考え難いのではないか。しかし、厳密にいえばそれでも口承過程に関わった人々により微妙にずれが生じた結果が地名の伝承過程での変化として記録されて残るのである。地名とは、歌の場と関わる問題である。そこで次には

人麻呂の伝承と歌の場という点に配慮したい。

## 二、歌の場

人麻呂には死の伝承物語があった。それは、巻二に収められた自傷歌群によつて知られる。この歌群も一度に成立したというような性格よりも、複雑な成立過程を考えるべきなのであるが、次に引用する。

I 柿本朝臣人麻呂の石見国に住りて臨死らむとせし時に、自ら傷みて作れる歌一首

鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつ

あるらむ(二二三)

II 柿本朝臣人麻呂の死りし時に、妻の依羅娘子の作れる歌二首

今日今日とわが待つ君は石川の貝に(一は云はく、谷に)交じりてありといはずやも(二二四)

直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ(二二五)

III 丹比真人(名闕けたり)の柿本朝臣人麻呂の意に擬へて報へたる歌一首

荒波に寄りくる玉を枕に置きわれここにありと誰か告げなむ(二二六)

## IV 或る本の歌に曰く

天離る夷の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし(二二七)

右の一首の歌は作者いまだ詳らかならず。ただ、古本、この歌をもつてこの次に載す。

これまで地名の変化として捉えてきた問題を、歌の「場」ということでさらに考えてみたい。即ち、それを歌の場として考えたとき、人麻呂終焉挽歌群が石見相聞歌の参考になるからである。人麻呂終焉挽歌群には、歌の場としてありえない状況が展開されている。

人麻呂自傷歌に続く妻依羅の娘子の歌二首は、時間的なずれを認め、さらに応答歌ではないと認めても、まったく歌の背景地を異にする。人麻呂は鴨山という山中の死をうたうのに対して、依羅娘子は「石川の貝に交じりて」とあつて、石川での水死をうたう。そこで山中の川で人麻呂が死んだんだとする考えも出来るにせよ、人麻呂歌と依羅の娘子歌は、その背景になつてゐる伝説に「場」の違いがあつたのではあるまいか、と想像される。むしろIとIIに不合理なものの背景がそれぞれあつて、それらの背景に基づく山中の死と川の溺死ということになるのであろう。

さらにⅢである丹比某の二二六番は、「柿本朝臣人麻呂の意に擬へて報へたる」とある。これはこの歌群の構成から二三番の人麻呂自傷歌に対する返歌があつて、それに對してさらに丹比某がまた返歌したものと解釈すべきものである。ところが、この万葉集の現在見られる配列構成からは、「荒波に寄りくる玉を枕に置き」という海辺での水死を背景にする歌の「場」がどこから生じるのであろうか。さらにⅣは「鄙の荒野」が横死の場所になつてゐる。ⅠⅡⅢⅣは全て歌の場を異にするのである。

人麻呂自傷歌がその題詞と歌の内容から仮託伝承されたものであること、そしてこれらの歌群が山中の死と溺死という二つの横死を語る物語があつたこと、については既に述べたことがある。しかも、これら自傷歌群に共通するイメージは、石見相聞歌群の世界でもある。石見の海と山に關わる死のイメージということである。

人麻呂の歌に異伝が多い。それを伝承ととるか、推敲ととるか論が分かれてゐる。しかし、人麻呂の歌は必ず書承で伝えられるものではない。むしろ享受の有り様からは、伝承という手段が圧倒的ではないか。そこには、伝承で享受される道程があつて、そして万葉集の資料となる文献としての定着があつた、ということになる。

一方記載されたものは、必ず異説が生まれないというものでもない。むしろ、記載されてもやはり異文という問題が生ずることは平安時代の物語をはじめとして、女流日記や歌集などを見ても明らかである。したがつて、文献に纏められたからといって歌の場が不変なものでもない。たしかに記載されることにより、歌の背景としての場が固定されるにせよ、享受の方法が目で見るといふ読書とは限らないのであるから、いやむしろ朗詠される場合もあるのであるから、年月を経て享受されるにしたがつて、少しずつ場の変化は予想されて良い。また、人麻呂自傷歌群に見られる異なる死地が推敲によるものでもないことも自明のことである。人麻呂の石見相聞歌が推敲による異伝であるにせよ、或いは伝承過程での異伝にせよ、朗詠されて享受されるものである以上、歌の場はまったく不変ということはないのであつて、わずかであつてもずれを見せて当然なのである。

ところで、人麻呂自傷歌群は基本的には、山中の死と海浜の死の歌で構成されている。これは、石見相聞歌の影響ではなからうか。というのは、石見相聞歌の素材としては、海と山との対照に特質を見せるからである。



## 三、山

石見相聞歌の特質は、山と海の対照にある。即ち、長歌では「石見の海 角の浦廻を、玉藻なす 寄り寝し妹を」(二三二)までの二十四句、「つのさはふ 石見の海の、深海松生ふる」までの十二句は、海を持つ特性から女性に対する愛情を表現している。それに対して、「いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山」と二三番は収斂されている。また、第二長歌は「嬌隠る 屋上山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠ろひ来れば」(二三五)という。海が玉藻に代表される妹との心情表現に用いられているとすれば、山は愛しい妹との別れを象徴する内容にある。そこで海を親愛の気持ちを表すものとすれば、山とは離別の表象になっているのであるところから、万葉の海と山についてまず考えてみたい。

まず山であるが、金屋和歌子氏が分析を試みられていて、三つに分けている。地名の山、非地名の山(秋山・高山)、単独の山と言うのであるが、さらに山と川の組合せが最も多いことも指摘している。この山と川の組合せが、明日香川、泊瀬川、吉野川、佐保川等の結びつきになるのである。京と離宮とは川と山の「清けし」地に造営されている

ことにも展開することは、佐藤文義氏の研究で明確にされるところでもある。<sup>(8)</sup>

飛鳥川と山とは飛鳥の都と関わるし、吉野川と山とは吉野離宮と関わり、また佐保川と山とは平城京と関わりをもっている。そしてその都と関わりを持つことは、たんなる農業とか、飲料水とかという意味からの関心というばかりか、「山と川」とが「清けし」であることが必要だったのであろうし、山川の好き地であることで都が「見立て」られて造営されたのであろう。

さて、石見相聞歌中の山の表現は、下記の如くである。

一三一 番歌と一三八 番	いや高に山も越え来ぬ	靡けこの山
一三二 番歌	高角山	
一三三 番歌	み山	
一三四 番歌	高角山	
一三五 番歌	渡の山	屋上の(「室上山」)山
一三七 番歌	秋山	
一三九 番歌	打歌の山	

以上のことから石見相聞歌群で山がうたわれていないのは一三六番歌だけということになる。さらに固有名詞と考えられないのは、一三一、一三八番の山と一三七番の秋

山であつて、他の用例は、み山は「深山」とも解せられるし、「高角山」も単なる普通名詞ということではない。しかも、普通名詞の山も山という一般的な内容を意味するのではなく、一三一番は高角山であろうし、一三七番の秋山は長歌一三五番を受けているのであるから渡の山ということになる。

一方、海の描写が全て妹に収斂されていくものである。従つて、妹を形容する長歌の長い序の役割を担うものであるため、反歌には妹をうたつても、その短い形式故であろうか、妹を形容する海が全く登場することがない。しかし、海も角の浦廻とか、和多津とか、韓の崎などの固有名詞にこだわる。この山にせよ、海にせよ、とにかく固有名詞と強く関わりを見せるのであつて、海一般、山一般などと言うことにならないのも石見相聞歌群の特質なのである。

ところで山は歌群全体に素材として用いられている。一三二番歌では「玉藻なす寄り寝し妹を」に続き、第二十五六句の「露霜の置きてし来れば」からは、海上から陸上に描写が展開している。そこにあるのは、妹を置き去りにして、八十隈ごとに振り返り、さらにいよいよ妹の居る里が遠ざかったことを「いや高に山も越え来ぬ」という隔てるものを提示している。その隔てる山に對して、「妹が

門みむ 靡けこの山」と叫ぶのである。靡けと叫ぶ山とは、高角山であり、み山であり、秋山であり、打歌の山でもある。とすればとりわけ靡かせたいと願つた山とは、妹との別れを決定的にする所でもあるから、伊藤博氏の「見納め山」という理解が正しいことになる。

故郷を去る場合において或る特定の山が惜別の対象になることもあつた。額田は近江還都に「味酒 三輪の山」(一・一七)を見続けたいとうたつて土地誉めとしている。或いは、卷十四の上野の国の歌に、

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ(三四〇二)

ともあつて、峠では夫が妻に袖を振っているのを、妻がはつきり見た、とうたっている。或いは東歌とは逆に、武藏国埼玉の都から足柄の峠を越えて西に旅した防人藤原部等母麻呂は、

足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも(二十・四四三三)

と、夫から妻に問いかけている。

三四〇二番には碓氷の山とあつて御坂とか、坂、峠などとはないが、山には当然坂や峠を含む表現であるから、石見相聞歌群の山もかかる内容で理解してよい。引用した防

人歌同様に、人麻呂も山を越えるとき妻への惜別の情はますます深まるのであろうから、山で袖を振り、さらに山越えてから靡けと山に叫びたくなるのもうなずかれるのである。勿論、山に「靡け」とは、人麻呂の独自の表現ではないのであって、先例として卷十三・三三二四二番歌、

ももきね 美濃の国の 高北の 八十一隣の宮に 日向に い行き靡かふ 大宮を ありと聞きて わが通ひ道の 奥十山 美濃の山 靡けと 人は踏めども かく寄れと 人は衝けども 心無き山の 奥十山 美濃の山

などとなる。

しかし、引用した歌と人麻呂のうたとは叙情の質という点で根本的な相違を認めざるをえない。即ち、卷十三の歌では、人が踏むという行動を伴い、さらに人は衝くといひながら、山は心なく動かない、とうたう歌である。従って、人麻呂は山に向かつてさけぶだけである点に、人麻呂の歌で示した賛仰の精神と同様に踏むとか、衝くとかというのではなく、何もしなくても神であると天皇を讃えた如くに、行動すら起こしえないし、またそう考えることすら出来ない所に嘆きの強さを表わしているのである。

この悲嘆の強さは、山に拘りを見せることにもなった。

つまり山を越えるというとき、離別の悲しみがさらに増すのは時などで袖を振る他の万葉歌によって知られるし、さらにこれまでの土地の支配神とは縁のない異郷になるためでもある。袖を振る行為とは、招魂のためである。別れなければならぬ愛しい妻との最後の離別の確認場所が山だったのである。離別の袖振りの行う所として、また異郷との接点としての山にとりわけ拘りを見せるのが石見相聞歌の特質なのである。

#### 四、海

さて、山と川とは万葉歌の世界で極一般的な対になっているが、海と山はどうであろうか。古事記神話の日向三代では、山の神の娘と海の神の娘との結婚が海の幸と山の幸との豊饒を約束するものとして天つ神の系譜に関わり、神話が完成している。続いて人の世となる神武天皇は山神と海神との系譜を受け継ぐ形で登場している。

万葉にも興味深い歌がある。

高山と 海こそは 山ながら かくも現しく 海ながら 然真ならめ 人は花物そ うつせみの世人(十三・三三三三二)

ここにあるのは、山や海が共通するものであり、さらに

それらが人間の生と対比されてうたわれていることである。山と海との対比ということでは、舒明天皇の国見歌も参考になる。

大和には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立つ立つ 海原は 鷗立つ立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は(一・二)

舒明天皇の歌では、まず「天の香具山」という土地誉めの手法として、初句から第三句迄がある。そして、その山で国見が行なわれたとして、続いて国原と海の豊饒描写が展開している。煙の立ち昇る国原とは、仁徳天皇の故事を連想させるものであり、鷗が飛び立つ海原とは、やはり仁徳天皇の、

おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば  
淡島 自凝島 檳榔の 島も見ゆ 放つ鳥見ゆ(記歌謡・五三)

とうたつた海原が連想される。

一首のなかに海と山とを詠み込む歌は、軍王の歌(一・五、六)や人麻呂がうたう長皇子の獵路の歌の或る本の反歌(三・二四一)、不尽山の歌(三・三二九、三三二)、赤人の紀伊の国への行幸の時の歌(六・九一七、九一九)、

さらに家持の二上山の賦(十七・三九八五、三九八七)と布勢の水海の賦(十七・三九九一、三九九二)等がある。しかし、これらは山と海に限定するものではなく、さらに多くの歌では川もが加わったりしている点には配慮しなければならぬ。

しかし、山と海の二点に焦点を当てて作られた歌は卷十三に一首見られた。それが三三三二番歌であった。その他にも卷十三に収められた長歌と石見相聞歌との比較は試みられている。

天雲の 影さへ見ゆる 隠口の 泊瀬の川は 浦無み  
か 船の寄り来ぬ 磯無みか 海人の釣為ぬ よしゑ  
やし 浦はなくとも よしゑやし 磯は無くとも 沖  
つ波 競ひ漕ぎ人来 白水朗の釣舟(三三二五)

反歌

さざれ波浮きて流るる泊瀬川寄るべき磯の無きがさぶ  
しさ(三三二六)

卷十三については、遠藤宏氏、さらに曾倉岑氏などの研究に示されているごとく、奈良朝の作品として理解すべきものであるうし、そこで試みられている表現が歌謡的性格を根底にして和歌の水準まで高められていることも認めやすい。<sup>10)</sup>さらに石見相聞歌と卷十三の三三二五番歌との比

較は曾倉氏や森朝男氏も試みている。<sup>(11)</sup> とりわけ歌謡から和歌と言うテーマで研究された高野正美氏は、両長歌の詳しい分析も試みられていて、三二二五番との比較からは、石見相聞歌は豊饒な和多津に代表される海を描くために、本来卷十三の比較歌に見られる幸多く繁榮する角の海岸の景観を不毛の海に描いている、としている。<sup>(12)</sup>

ところで「天雲の」の歌は、雑歌に収められているのであるから、本来の姿がどうであれ奈良朝には泊瀬の土地を誉める歌という理解がされていたのであるまいか。

「浦無し」「磯無み」とは、豊饒を直接描写するものではなくても、「よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 磯は無くとも」と展開することで、土地誉めになる。しかも、この歌は、人麻呂石見相聞歌の序の部分と類似する表現であるところから、直接学んだものであるかは不明とするべきであろうが、人麻呂がこのような土地誉めの歌を学び、そして石見の角の海に対する表現に用いたのであろう。とすれば、そこには土地を離れる時にかつては額田王も試みた土地誉めの歌という伝統に負っているのであるし、その伝統を継承したことにもなる。とすれば石見相聞歌の「一番と一三八番は、ともに「寄り寝し妹」と「妹が手本を」とある妹に別れを告げた石見に対する土地誉めの内容を

を伴う長い形容なのである。そして、土地を誉めることで、永別しなければならぬ石見の妹に対する激しい思慕の気持ちを伝えただのである。

人麻呂は土地誉めの伝統を踏まえた海の豊かさを形容することで、別れなければならぬ石見の妹に対する恋慕を表した。まさしく石見の海という景物により、妹との悲しい別れの情を示したのである。上野理氏は、第一の長歌の冒頭による二十一句に及ぶ石見の海の描写を、「つづいて描かれる妻と別れる現実の時空とは対照的に、夫婦の破綻のない充足した不変の世界」として設定されていることも考えられる、としている。<sup>(13)</sup>

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の仮廬し思はゆ(一・七)

この歌は宇治の京を去るにあたり、土地誉めの歌として代作されたものである。ところが額田自身の個人的感情までもが表現されたがために、「追想」とか「追憶」とかという内容迄もが関わってしまったのである。起源の本質は土地を誉める歌である。古くは額田王にも見られる手法でもあるが、ここで確認したいのはこのような土地誉めを用いて感情を表現することは、その風土とか、かかる経験があったとか、とにかく全くの想像上の創作とは考えがた

いのであるまいか。

つまり石見相聞歌の妹を形容するための石見の海を描写した長い序とは、石見の風土とか、人麻呂の石見での経験とかを認めざるをえないということになるし、そこには風土と重ねられる妹との体験もあつた筈である。

## 結 び

石見相聞歌は固有名詞に拘りを見せるところに石見という風土を配慮しなければならぬ作品である。さらに海と山の二点に焦点を徹底して当てている。これは、卷十三にも見られるのであるが、やはり人麻呂の個性として捉えるべき内容にある。海と山の二つの視点に拘りを見せたのは、名前が知られる歌人では人麻呂ただ一人である。家持等も海と山に興味を示しているが、残念ながら川までも描いていて万葉の常識と言える。人麻呂は、海と山の二面から石見の風土に素材して集中的に離別の心情を描いたのである。

石見の海とは豊饒なるものであつた。豊饒なる海こそは、石見の妻の真実の姿なのである。その石見の妻との離別を確認する場所は、まさしく山なのである。山によって永遠の離別が確認されるのである。その山もまた石見の風土に

支えられている山であることは、小竹が熊笹であるという認識にも繋がるのであるが、本論で示した固有名詞に対する固執でも理解される。海と山共に地名に拘泥しているのである。これが石見相聞歌群が風土に支えられている証なのである。

日頃石见到近い地で生活するものにとつては、この石見相聞歌の風土ということに関心の的になつている。この歌の誕生地が京師であろうと、石見であろうと人麻呂が固有名詞に固執して創作していることは、彼の実人生の何らかの反映を考えなければならぬ。とりわけ第一長歌の長い序は、風土の魅力を十二分に發揮したものであり、それを支えるのが地名・固有名詞なのである。この論は推敲説を否定するためのものではないが、すくなくとも固有名詞に拘り続けていることは、推敲ということではなかつた。それは第一義的に人麻呂の体験によることと理解する次第である。

人麻呂石見相聞歌とは、石見の豊饒なる海が愛しい妹に喻られて、また石見の熊笹に覆われた山が妹とわれとを永久に隔てる厳しく悲しい障害となつている。山も海も石見という風土に支えられているのであつて、その風土という支えにより歌が誕生しているのである。

注

- (1) 高木氏「柿本人麿」(『上古の歌人(日本歌人講座1)』所収)  
清水氏「わが石見」(『女子大國文』九五号)
- (2) 『柿本人麿』(日本詩人選2) V別離 一五一頁
- (3) 「石見相聞歌の構造」(『日本文学』一六卷六号)
- (4) 「石見相聞歌の構造と形成」(『古代和歌研究3』所収) 二八〇—二九三頁
- (5) 丸山隆司氏は、伝誦と伝承の区別として、「その担い手を入麻呂自身ととらえるか、入麻呂以外のものととらえるかによって、論の枠組が異なる。かりに、前者を伝誦説、後者を伝承説としておく」(△異▽——石見相聞歌をめぐる——藤女子大学国文学雑誌 四三号)と述べている。
- (6) 「入麻呂終焉挽歌群の構成について」(『広島女学院大学論集』三三集)
- (7) 「万葉の『山』」(『愛文』二五号)
- (8) 「万葉の聖水と歴代の宮都」(『小樽女子短大研究紀要』十四号)
- (9) 注(4)に同じ。
- (10) 遠藤氏は「万葉集卷十三歌——相聞・問答を中心として——」(『国語と国文学』五三卷五号)や「万葉集十三所収の行路死人歌——三三三五〜三三三八の場合——」(『国語と国文学』六三卷十一号)等で、この問題を含めて論を展開している。
- (11) 曾倉氏 注(10) 同氏論文  
森氏「人麿と相聞——石見相聞歌の序詞をめぐる——」(『論集上代文学十六冊』所収)
- (12) 「石見相聞歌の序」(『日本文学』三六卷十二号)
- (13) 「石見相聞歌の生成——航行不能の辺境の船歌より登山臨水の離別歌へ——」(『早大国文学研究』七九号)